

---

胸騒ぎの雨夜に

S G M

---

妙に、胸騒ぎがする。

胸騒ぎというのは、ふとした偶然の積み重ねでこみ上げてくるのではないか。彼は職場から自宅への道すがら、そんなことに思いを馳せていた。

思えばここ数日、なんとも厭な偶然が重なりすぎている気がしていた。

7日前。大伯母が首を吊ったのだと、母親から連絡があった。それは父の母の姉、つまり祖母の姉だった。それほど懇意にしていたわけではないが、法事などでは挨拶を軽く交わすような感じであった。大伯母を頭の中で思い描くと、真っ先に笑顔が想起される、そんな明るく快活なイメージがあっただけに、その報を受けたときは非常に驚いた。

優しすぎたのかもしれないわね、と母親は電話で言った。たしかにそうかもしれない。

優しい人は、いつも優しくあろうと努力できる強い人だ。

そんな言葉を聞いたことがある。亡くなった大伯母も人に優しくしよう、明るく振る舞おうと頑張りすぎて、疲れてしまったのかもしれない。人の優しさの裏には、絶え間ない努力があることを私たちは忘れがちだ。

ふと寒気が彼を襲う。

彼は現実に意識を戻す。夜道には、見えない雨が降っていた。霧のような細かな雨だ。このあたりには街灯が少ない。髪や顔をゆっくりと滴り落ちる水の間、空気を湿らせる静かな水の音が、見えない雨が降っていることを彼に感知させた。天気予報では雨が降るなんて言っていなかったような気がする。濡れ始めたら、もう急いで帰るのも馬鹿馬鹿しくなった。

二日前にも、厭なことがあった。近所の小学校で事件が起きたのだ。それは近所の人々の通報で明らかになった。学校の正門にカラスがいたのだそう。それも頭部だけ。正門の鉄柵の突起にカラスの頭部が突き刺さっていたそう。彼はその話を聞いた日、夢を見た。歩いていると、小学校が見えてくる。鉄柵に突き刺さったカラスの頭部が見えてくる。そのカラスはなぜか笑っている。それは気味の悪い笑みだ。人間を蔑視しているような、厭な笑みだ。

ふと犬が咆えた。

彼はまた現実に戻る。いつもは決して咆えない犬だった。どちらかといえば、人懐こいほうだ。その犬が冷たき夜に向かって咆えていた。それは恐れているような感じ

だ。なにかに怯え、それを追い払うかのような尖った声だった。

それをやり過ぎ、間もなくして自宅マンションが見えてきた。彼はふと気づいた。誰もいないはずの自分の部屋に明かりが灯っていることに。

—そうか、アイツが来ているのか。

彼は咄嗟に理解した。彼は近くの廃屋の軒下に入り、鞆の奥から携帯電話を取り出す。そして、とある番号に電話をかける。女がいるであろう自分の部屋からはかけられない相手だった。いや、かけていることを察知されてはいけない相手だ。

しかし、相手は出ない。無機質な「メッセージを残しますか」という声を途中で切る。

ここ数日、何度かけても相手が出ることはなかった。かけ直してくることもない。こんなことは初めてだった。これも、彼にとつて厭な偶然のひとつだった。

彼は携帯電話をしまうと、そぼ降る雨道を自宅に向かつて歩きはじめた。マンションの階段を昇っているさなか、なんとも厭な匂いが鼻をついた。なんとも酸味がかつた、人を不快にさせるような匂いだ。なるべく呼吸を浅くして、自分の部屋に向かう。

彼は部屋の前に立つと、ノブに手をかけてゆっくりと回した。しかし、それは冷たく

彼をあしらう。鍵がかかっていた。少し違和感を覚える。女はいつも鍵を開けっ放しにしているからだ。いつも彼がそのことを注意しているのだ。彼は内ポケットから鍵を取り出して、解錠する。扉を開けると、酸味がかつた猛烈な匂いが、彼を包みこんだ。先ほどまでは空気で中和されていたが、直接鼻腔を刺激してきた。

「これ、なんのにおい？」

彼は玄関に入ると、奥に向かって声をかけた。少しばかり間があつて、奥から女の声をする。

「トマトよ」

いやに素っ気ない返答だった。彼は玄関に上がると、台所のほうに目を遣った。女が台所に立っている。

「濡れたんじゃないの？」

女は彼のほうを見るでもなく、火にかけられた大きなステンレス製の寸胴を見つめていた。それは見たこともない異様に大きな寸胴だった。

「ああ。それなんだ？」

「買ったのよ」

「なんで？」

「スूप作るの」

彼は湿気を帯びた上着を脱ぎ、ハンガーにかける。

「それ、すごいにおいだよ。部屋の外まで漂ってる」

「そうかしら。あんまり気にならないけど」

束の間、部屋が静まりかえる。聞こえてくるのは、グツグツと煮こまれる寸胴と少しばかり勢いの強くなった雨音だけ。彼はダンスの引き出しからバスタオルを取り出す。

「シャワー浴びるよ」

返事はない。女はまだ寸胴を見つめている。蓋が閉まっている寸胴を。

浴室の扉を開ける。ふと、違和感を覚える。壁が湿っている。それほど時間が経っていないであろう細かい水滴が凝結している。

「風呂使ったのかい」

すこし間があつて、

「そう」

と女が答える。彼は扉を閉め、シャワーを浴びる。冷えた体に温かい水が染みる。縮こまっていた血管が拡張していくのが分かる。そのとき、浴室の外から小さな機械音が聞こえてきた。それは電話の着信音のようだった。その音は2コールほどあって、消えた。いや、女が消したのかもしれない。彼は気にせずシャンプーのボトルを手にしたとき、ふとボトルが置いてあったところに、やや赤黒い染みがあることに気づいた。それは一円玉ほどの小さな染み、いや水滴のようだった。

—赤黒い水滴？

シャワーをかけると、それはあつという間に溶けて消えていった。そんなものははじめからそこになかったかのように。彼は鉄錆びかなにかだろうと結論づけた。

「ねえ」

突然、背後の扉の向こうから女が声をかけてきた。彼は年甲斐もなく体をびくりと震わせるほど驚いた。

「なんだよ、急に声かけるなよ。驚くじゃないか」

湯気で曇ったガラス戸に女の影が浮かんでいる。ガラス越しの女の陰影は微動だにしない。

「聞いてるか」

彼は少し落ち着きを取り戻し、ふたたび声をかける。

「シャツ、借りてもいい？」

女がやけに小さな声で言う。

「いいけど……なんで？」

「汚れたの」

そう言うやいなや、女は立ち去っていった。なんだか、女の様子が変だと彼は思う。いつもと何かが違う。しかし、なにが変なのかと問われても明確に答えることができない。それはまるで霧のようだ。そこにあるのに、目に見えているのに掴むことはできない。掴もうとすれば、それは指の隙間から洩れていってしまう。そんな感じだ。シャワーを浴び終えて、彼はバスタオルで体を拭きながら浴室を出る。女はまだ寸胴の前に立っていた。服は彼のものに替えていた。

彼は髪をやや粗雑に拭きながら、

「なにかあった？」

「トマトがね……」

女はこちらを見ることもなく、ぼそぼそと話す。

「トマト？」

「トマトを、たくさん送ってきたの」

「実家からかい？」

女の実家は農家をしていると聞いたことあった。

「切つてるときに、汁が飛んできたの」

おそらく服の汚れのことを言っているのだと理解するまでに、少し時間がかかった。寸胴の横の俎板の上には、トマトがふたつ置いてあった。

さきほどまで部屋を覆っていた酸味がかった匂いはやや薄れていた。台所の横にある居間のカーテンが揺らめいているのが見える。女が窓を開けたのかもしれない。

「スープはもうできるの？」

「まだよ。すぐく煮こまないとだめなの」

彼は女のほうに向かって歩いていく。近くまで寄ったところで、

「なによ？」

女は突然、ヒステリックな声をあげた。女は怯えたような、威嚇しているようなそ

んな目で彼のほうを見ている。

「いや、ビールを取ろうと……」

彼は女の尖った視線に戸惑う。もしかしたら、生理なのかもしれない。そんな考えが脳裏を掠める。

女は冷蔵庫から缶ビールをひとつ取り出し、彼に渡した。一瞬、触れた女の手は、異様に冷えていた。まるで、亡き人の手を握ったような感じだ。

「どうした？手が冷たいよ」

「トマトを洗ってたから」

女は、下手な笑みを浮かべた。なにかを取り繕っているような感じの笑みだ。

男はビールを受け取り、浴室のほうに向かっていく。拭き終わったバスタオルを浴室の脇にある空の洗濯機に入れ、そのまま居間に向かう。

カーテンは揺らめいている。彼は窓を閉める。雨のせいで窓のサッシはびしょ濡れになっていた。

「窓のところ濡れてるよ」

彼は台所を横目に見ながら、洗面台に置いてあるタオルを取りに行く。

「誰に電話してたの？」

彼の背中に女の声が問いかける。

「電話？」

最初、彼はなにを問われているのか分からなかった。

「家の前で電話してたでしょ」

女の口調は異様に抑揚がない。やっと彼は何のことを問われているか理解したが、少しとぼけて、

「家の前？」

「見てたの。窓からあなたを見てたの」

彼は女が窓から自分を見つめている場面を想像し、すこし冷やりとする。厭な感じだ。

「ああ、会社だよ。伝え忘れたことがあったんだ」

「そう」

女はそれ以上なにも言わなかった。彼は洗面台にかけてあったタオルをわし掴みにすると、居間に戻って濡れたサッシを拭いた。窓を閉める。さきほどより雨音が強く

聞こえるようになった気がする。彼はタオルを持ったまま、洗濯機に向かう。そして、持っていたタオルを洗濯機のバスタオルの上に放る。

ふと彼のなかに小さな疑問が浮かぶ。

「おい」

女に背を向けたまま、声をかける。

「汚れた服は？」

女の返事はない。煮立つ音と少し強くなった雨の音が際だって聞こえる。

「洗濯機に汚れた服がないけど」

男はもう一度言う。

「棄てたの」

「棄てた？」

「ええ」

女は寸胴の蓋を開け、おたまで中身を混ぜ始める。ゆっくりとゆっくりと、中身が崩れないように注意深く混ぜている。

彼は、問い詰めることはせずに居間に戻る。居間のテーブルの上には水滴をまとわ

せて、少しばかり温くなったであろう缶ビールが置いてある。

彼は腰をおろして、テレビをつける。ニュースが流れていた。芸能人の不倫問題について取り上げているようだった。缶ビールを開け、口に流し込む。思っていたよりも冷えたビールが喉を流れていく。

そこに女が小皿をもってきた。小皿にはスライスされたトマトが載っていた。「近くのスーパーで特売だったの」

女はそう言いながら、小皿をテーブルの上に置いた。彼はスライスされたトマトをひとつ、取り上げて食べてみる。口のなかに甘味が絡みつく。異様に甘いトマトだ。品種改良によってつくられた自然とは異なる甘味がする。不自然な甘味といってもいい。トマトを咀嚼しているとき、彼は些細な引っかけかりを覚えた。

「実家から送ってきたんじゃないかかったか？」

女は微笑む。

「勘違いしてたわ」

そう言うと、女は台所に戻っていった。彼がテレビに目を遣ると、芸能ニュースは終わっていた。神妙な顔つきをしたアナウンサーが喋っている。

「……午後に見えられました首が切断された遺体は、二十代から三十代の女性であると捜査本部から発表がなされー」

それは彼の住んでいる場所からそれほど離れていない公園だった。小さな湖があり、休日にはカップルや子ども連れの家族がよく訪れる、平和な公園だ。何度か彼女とも行ったことがある。ニュースによれば、その遺体は腐乱状態から死後数日が経っているとのことだった。

彼は厭な胸騒ぎを覚えた。その事件は、なんだか他人事ではないような気がした。「バラバラ殺人があったらしいわ」

台所から女の声がする。

「恐いわね、人間って」

それは彼に問いかけているようにも聞こえるし、ひとり言のようにも聞こえた。または、自身に言い聞かせているようにも。

「あともう少し煮込めば……」

女の声は猛烈に強くなった雨音でかき消された。

「お前、携帯変えたか？」

彼は浴室で聞いた電子音を思い出し、台所にいる女に問いかけた。女は答えない。雨の音で聞こえなかったのかも知れない。もしくは……。

彼の心は不安定に確信めいた胸騒ぎで覆い尽くされつつあった。彼は傍に置いてあった携帯電話を手取る。そして、彼女の電話番号にかけようか迷い始めた。親指にほんの少し力を入れれば、すべてが明らかになるような気がする。しかし、彼の心中には、知りたい気持ちと知りたくない気持ちとが混在している。彼は携帯電話の液晶に表示されたなら法則性のない数字をぼんやりと見つめている。雨はますます強くなるばかりだ。

〈完〉